

牧島 幸未 さん

●植野小学校 6年

私の漫画でみんなが笑顔に

私の将来の夢は、漫画家になることです。ストーリーを考えるとわくわくして、楽しくなるからです。小さい頃から、友達とお絵描きをしていて、絵を描くことも大好きだからです。

私は、漫画を読むとおもしろくて笑顔になれます。悩んでいるときも、私に勇気をくれたり感動をくれたりします。だから、私も読んでいる人がうれしくなったり感動したりするような漫画を描いて、みんなが幸せになったらいいなと思います。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの メッセージ



市民の皆様には、輝かしい新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年、全国的に地震や台風などの自然災害が相次ぎました。比較的自然災害が少ない本市においても、一部で大雨による浸水などの被害が発生し、あらためて市民の安全安心に向けた対応策を講じることの必要性を強く感じました。今後も有事に対する備えをしつかりしてまいります。

また、全国規模のイベント誘致を積極的に行い、今年の全国山城サミット開催や、平成31年度日本女性会議の本市開催が決定しました。全国山城サミットは、11月に開催し全国から歴史や山城のファンが本市に集結します。「おもてなしの心」で来場の方々を精一杯サポートできるように、準備を進めてまいります。

さて、佐野インランドポートがいよいよ今年秋ごろに完成します。交通の要衝としての立地優位性を最大限活用するため、実現に向け取り組んできたわけですが、「内陸の港」となる佐野インランドポートの実現をステップとし、北関道の出流原PA周辺における総合物流拠点の開発・整備につなげ「交流拠点都市」の実現を図ってまいります。

今月8日には、市内3会場で成人式が行われます。将来の佐野市を担う若者たちが、地元に戻り地元で活躍できるよう、雇用の充実に向けた取り組みを推進してまいります。

今年も酉年です。「酉」という字には、成熟するという意味があります。酉年にふさわしく、成熟の年となるよう努力してまいります。今年1年が皆様にとって素晴らしい年となりますよう心からご祈念申し上げます。

岡部正英



今回の表紙 「初日の出」 平成28年1月1日撮影 浅間山(奈良瀨町)

昨年の初日の出は、穏やかな日の出となり、奈良瀨町の浅間山では多くの方がゆっくりとあがる太陽を見つめていました。

平成29年、本年もよろしくお祈りいたします。

たかじっこ まいこ
高實子 麻衣子 さん
(水木町)



キラリ★
話題の「ひと」

○プロフィール
「あきやま有機農村未来塾」に参加。
地域の皆さんと地域おこしの活動に奮闘中。

願いのバトンをつなぐ

秋山地区の活性化を図る「あきやま有機農村未来塾」では、その事業として「手揉み茶の製造・販売」、「酒米と日本酒作り」、「ワイン醸造のためのヤマブドウの栽培」などに取り組んでいます。その一員として活躍する高實子麻衣子さんにお話を伺いました。

★「あきやま有機農村未来塾」に参加しようと思ったきっかけは？

自分で作ったワインが飲みたかったからです(笑)。しかし今は『氷室地区を活性化させたい。子どもたちに氷室の魅力伝えていって欲しい』と思うようになりました。

★携わる中で思うことは？

お年寄りから若い世代まで、地域の人みんなで一体となり、地域おこしを進めています。地元の氷室小学校が統合され小・中一貫校になることで、学校と一緒に地域のコミュニティも無くなってしまうのではないかと危機感を持っています。

★活動の中で力を入れたいことはなんですか？

農業の知識はまだまだ未熟なので作業する中で戸惑ってしまうことがあるのですが、未来塾の行事に参加するた

めに来てくださる皆さんと、氷室地区の人たちとの架け橋になれたらいいと思います。

また、ホームページやフェイスブック、情報紙「あきやま暮らし手帳」で情報を発信していきたいです。

★現在の「夢」は何ですか？

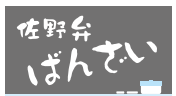
未来塾が行っている、楽しく・生きがいのある事業がビジネスに繋がりが、地域みんなの居場所作りに繋がればいいと思います。そうなるためにも子育て中の仲間や、同じ思いを持つ仲間との繋がりをいっそう深めたいです。また、氷室小の児童が演技しながら歌う氷室地区に残る「水木の田植え歌」を次の世代に伝える活動ができればいいと思います。

お話を伺いながら、母親として思う氷室地区の現状が伝わってきました。

これからも高實子さんの願いと氷室地区の願いのバトンが未来へつながることを期待したいです。

高實子さんの思いや「あきやま有機農村未来塾」との関わり方などが、3月4日に行われる「全国学びとまちづくりフォーラム」で発表されます。ぜひ皆さんも聞きに来てください。

(市民記者 中里聖子)



掘りごたつを、フンゴヌキ
またはフンゴミゴタツなどという

かつて農村では、冬になるといろりに火をたき、炉端に家族が集まって、とりとめのない話をしながら暖をとったものです。昭和30年頃から、いろりが踏みごたつに変わり、「いろり」は家庭から消えていきました。

踏みごたつは、床を切つて作ったので、切りごたつともいいます。踏みごたつに足を踏み入れることを普通フンゴムといいますが、ツツベルともいいます。ツツベルは「入る」を強めるときに使います。踏みごたつは、普通フンゴミゴタツとかフンゴヌキゴタツなどといいます。

「今日はオメレテー(おめでたい)日だガネ。ンだから、みんなフンゴミゴタツにでもツツベッテサー(踏みごたつに入つてさ)、酒でもイッペー(一杯)ヤンベジャーネーケー(飲みませんか)」

掘りごたつを、フンゴヌキということもありますが、これはフンゴヌキゴタツの「ゴタツ」が省略された語です。

「うちのこたつはフンゴヌキンなってるから、足をフンゴメバ(踏み入れると)あつたケーよ。なにも遠慮なんかスッコターネーガネ(することはしないでしようよ)」

掘りごたつ(切りごたつ)の底の方には、足をのせる板が敷いてあります。その板をフンゴミイタ、あるいはフンゴミダイ(訛ってフンゴミデーともいう)などといいます。

(市民記者 森下喜二)

